

浮牡丹傳

二

欣
186
2

於
186
2

（Red seal impression)

七八人相をさぐて。やうび此所小来り。あひつひど豹太夫小わひ。ひてあつ人
 の。たごひと言をいひ。豹太夫の变化の出所を採んなる小来り。と
 嵯峨右衛門の退治せんたる小来り。とやう時又豹太夫の絵巻
 物に嵯峨右衛門は足下のみをけたまひ。变化のころをい
 絵巻といひ小とりの。嵯峨右衛門を執覽し。前夜は者か見え
 異なり。此繪もよこも異なることあり。頭かた者片手片足の者胸は
 かのたの野の者額蛭谷の元たるのと見え。今これをコ。都是
 紙臭のよこたの野の。黄白の蝶と見え。も金銀の。ひて。
 うらみとりに豹太夫果して然とあり。二室の床の下より出せしとや
 りと人のいりくか。変化の此画精の所為よこがひか。とりの。嵯峨太夫つ

浮世草子巻之二

十一



此画者藤原の信實とりのり。ついでこの時代づきの人の足下は定く
知たまふらぬ。豹太夫いも。そもく此信實とりのり。藤原隆信乃
子あり。曾て和歌をたぐはし。画圖をよくと。む人の像を假せ画とし。と
妙を得たり。諸画も又よくつぎぬ。後鳥羽順徳西朝はつて。譽を
時よあつせり。後鳥羽院御幸のうんとも。且供奉人をえつて。をりて
あつは。此定又御幸あつて。信實をりて。其行粧を三巻の絹繪
よつせられり。又四條院の御時似絵を。好あり。北面下臈御
隨身かぶ。影を信實よめて。與せられり。ことあり。是寺のこと着聞
集に載たり。又平義時後鳥羽院を隱岐国へ遷し。なり。時よ
御出家あつて。きよと。り。入られ。則御ぶ。と。おろさせたまひ。たちま。あ

御姿のかつせたまひたり。信實をりて。似せ絵。又寫させられて。七條
院よかつたまひ。一。支承久記。又見えたり。信實生前手づか。かの。と。か
像と。ゑ。ぐ。死後。又。如。圓。法師。其。像。又。對。一。歌。を。詠。し。て。悲。歎。乃
ち。ひ。と。寄。其。歌。よ
思ひつて。そ。の。影。を。か。か。り。に。面。鏡。を。何。あ。り。し。う。り。し。か。た。り。ん
是。新。拾。遺。集。哀。傷。部。又。見。え。たり。如。圓。法師。疑。是。信。實。乃。子
小。や。と。名。り。し。あり。父。隆。信。も。又。名。画。の。き。こ。え。高。し。然。則。此。絵。卷。物。の
今。長。祿。乃。時。よ。つ。り。て。二。百。七。十。余。年。を。経。る。古。画。あり。画。神。抜。出。て
形。を。あ。つ。し。し。こと。和。漢。又。例。多。し。吳。道。子。僧。房。の。壁。又。ゑ。か。さ。り。し。
驢。馬。夜。中。抜。出。て。僧。房。の。家具。を。踏。や。り。たり。盧。氏。雜。記。に。あ。り。せ。り。

我朝金岡の如いをも人のある所あり。さうぬに鏡剣乃とくひ。
 とて古物の精怪とかせし例拳つくとて。夏禹王の図一たぐ
 山海經の画神。異形とあり。此古画の怪をかをもさる。
 たぐひのうん。かりは此繪卷物の正しく是後醍醐天皇の御遺物
 小て当寺小おさめあり。物ありと息もつと人に。嵯峨右衛門ことと
 さいめりく打拵手お把る鉾弓箭の用おとねいし手持かく
 臂とおして握つる拳の力もおつとせて。彼奴又功を棄つて
 残念さよと心のうちおひかりいひぬ。豹太夫は對ひ変化の出所古画
 のいれをある。全く足下の博識よれり。いやく前と変化乃
 形をよけけひゆおに。おのづこ其出所も志とたり。全く足下乃

武勇にうれりと。おのふからぬ豹太夫。その功をゆつとるに團七倍は
 ありて。前小見とけけひのい嵯峨右衛門殿の功あり。後又出所とありら
 うら。僕が主人の功あり。文武の両士會せん。いつてその如きとあり。こ
 やと。借豹太夫いそ。名畫を失ふ。いへ。さるまればと。城とあり。へを
 せんをかし。焼とる。小あ。べう。とて。團七は命とて。枯枝木葉と集。とせ
 火とんだ。被絵巻物を焼失い。る。と。立の。煙の裏。は。百鬼
 や。夜行の異類の。か。ち。髪鬘とあり。れ。て。空天よ。放。て。さ。え。う。せ。其。余
 煙二道に。け。れ。一。道。は。嵯峨右衛門が。懐。は。一。道。は。豹太夫が。懐。は。り。り。ぬ。
 是乃災の神画。妖。は。糸。と。て。両人の。あ。ひ。ご。に。一。つ。の。火。を。お。こ。さ。し。て。希代の
 珍事と。惹。け。後世の話柄と。さ。と。べ。と。一。端。あり。け。り。

浮世全傳卷之一

十三 馬來堂藏



大船 船主 船

卷之二

十五 爲来堂



文士の伯耆の船の上の古待の怪を退かす

大鳥 嵯峨 右衛門

大鳥 嵯峨 右衛門



ようい生て尾を塗中又曳んよあつと。文繡を夜と一
 葛菽を食として。郊祭の穢牛とあつらん古又とつたてり
 好一高山の紫芝鐘山の緑葵以て鐵を療を
 一。國守の内命いおもいとつと多病よ託を
 御免を願ふあつと。妻八雲小おのま
 ちの所を語るるに八雲いひるはあつおわらん
 きたりて理るれど。娘が越せ一文を見んよ
 此度のころい津夫人の厚きおがめ一にてすあ
 あげあひぬるまのうあれい。若冲辞退ありて
 娘が首尾合まおのりうわくありまよ



古画の怪
 烟の裏に
 いづくもよめて
 飛去
 世子儀之丞小へ。仕官さまへ三あがりりて
 已よ京へおせて物学させあつたれい。津身仕あつ
 かれが立身の便ともありまらん。他國のまよ
 仕るふあつど。此國守よ仕へあひて家名を
 暉一あつい。津先祖への孝養よもありまらんかど
 いひてまよひる言葉も。又理るはあつたれい。豹大夫
 心躊躇くとも一決せざりたり。それいさおわてこよ
 石生團七一日私用ありて。鹿伏といふ所へあつらんよ
 比一も初秋のまゑあつたれい。残暑はあつことよ。此日を
 焚ふりれい。茂林のかげよ立ちりてやあつひ居よ

浮世丹全傳卷之一

十六 寫末

鍛鍛治の鉄平とらん者。もるうに團七と見つけ。ちづきてりひるる。へ團七殿
 こはよ所よて出合ぬ。それざり述三日又和殿をむ久て。前の日の勞とひら
 謝一アさんとかりひ居る。折節あるに。此であひハ幸多。彼野の酒家にて
 一盃をむらやさんりきく。とらん此者のかりひ。前の日倭文明神乃。神事
 角力の時此者米子の鮑取。熨斗むきと。とら論して打合る。團七が
 そりあろひひめて。変にあづけてむみる。其勞と謝せん。とあり。時又團七
 りひるる。其志へ過分あれと。参比日酒と飲。好まど。殊更和主よ
 錢を費さ。むら我意。又の移。それへ休。志の厚さ。の旨盃を酌。る
 一寺。くうけとさむ。ありとらん。鉄平これ。和殿の日。来入。とさぐれく
 酒を好。あひ。何ゆ。さづり。休。やと。同。な。れ。團七。と。我。か。移。て

酒の癖あり。酔もたて。前後とく。見む。中も。それ。変とひ。出。と。し
 ころ。主人度。教戒。とらん。あ。その。由。念。に。我。地。日。心。は。誓。ひ。て。酒。と。飲。む。ん。と。あ
 鉄平打笑ひ。和殿酒を。お。り。飲。あ。の。わ。の。少。く。飲。た。ま。らん。よ
 何とて。変をひ。出。し。らん。や。酒。を。飲。飲。む。ん。と。も。か。も。唯。小。人。が。志。を
 そ。の。ぶ。の。と。あ。れ。ば。枉。て。赤。い。へ。さ。あ。て。り。小。人。が。心。を。と。せ。ざ。り。あり。り。び。と。て
 袖をひ。ひ。て。あ。か。から。に。と。あ。り。る。む。ど。團七。や。ひ。こ。と。得。得。と。あ。ぶ。く。あ。づ
 つ。か。れ。て。那。酒。家。に。り。り。て。見。る。よ。背。後。の。高。き。岩。壁。よ。て。戻。風。と。う。て
 ま。り。た。る。ご。ろ。前。の。溝。川。あり。舟。板。と。渡。り。て。橋。と。も。自。の。あ。ら。る。よ
 破。も。る。芦。の。簾。と。掛。り。軒。端。と。も。朽。目。は。垣。衣。お。ひ。あ。け。り。
 ま。も。ろ。に。か。こ。む。垣。の。り。と。れ。玉。蜀。黍。た。く。生。の。び。鶏。頭。花。灸。花。を。の

咲くは。見るも熱げし。茂林の陰は。忘れし。寒蟬の色。凄急は。鳴立
家鴨の子の鳴連て。かけめぐるかど。唯苔井は。清水のあつこ
の。りづくは。涼し。鉄平團七を。導て。酒家の裏。入簀子よ
尻から。團七の諸祖。汗を。おりの。扇づ。居る。竈乃煙
たち。ちて。奥の方。見分。程。柴刈男。檮者。鳥粘。た。ひ
あ。高。や。う。色。して。話。酒。飲。飯。食。て。居。る。竈。の。辺。り。あ。の。ト。の
翁。抄。手。の。出。来。て。何。ま。あ。と。と。と。の。鉄。平。の。酒。は。た。さ。あ。り。て
来。よ。と。の。翁。の。酒。ハ。諸。白。と。さ。う。と。と。の。香。の。出。雲。の。友。嶋。の。柳。の
ひ。次。眞。軒。は。調。ト。て。ま。あ。せん。その。煙。籠。て。い。せ。く。お。が。さ。ま。ん。彼。処。の
日。陰。ひ。て。涼。風。の。通。る。あり。彼。方。へ。来。ま。と。り。ひ。て。発。と。り。来。て。飄。箏

糊の下に。冬。雨。人。と。此。は。居。ら。し。て。權。あり。て。酒。肴。取。と。り。て。持。来。ぬ。
鉄。平。盃。と。り。て。團。七。れ。と。む。團。七。い。ち。ち。前。の。り。の。と。く。我。酒。を。望。ま
ざ。れ。と。も。和。主。の。志。り。が。ざ。れ。ば。此。ま。あ。来。は。る。あり。唯。三。盃。を。限。と。り。て
其。餘。を。と。り。む。と。と。あ。れ。と。い。ひ。て。盃。を。う。け。飲。み。て。鉄。平。と。さ。も。鉄。平
飲。て。又。團。七。よ。う。入。團。七。再。こ。れ。を。飲。み。此。酒。案。外。は。養。酒。あり。た。れ。ば
さ。て。も。氣。味。と。い。ひ。と。く。舌。打。し。て。飲。み。世。の。常。言。は。始。入。酒。を
飲。中。比。の。酒。酒。を。飲。終。の。酒。人。を。飲。と。の。宣。哉。團。七。此。日。禁。酒。し。て
酒。又。渴。し。た。る。時。と。い。ひ。生。得。酒。の。香。を。聞。け。腹。中。の。虫。鳴。咽。り。て。自
製。一。が。た。れ。た。酒。好。あ。れ。ば。此。時。は。到。て。堪。た。の。ふ。と。あ。ら。じ。始。の。言。は
た。が。ひ。鉄。平。が。と。り。む。に。忘。し。か。が。え。ど。数。盃。を。傾。て。大。は。爛。醉。し。腰

刀とさうおた。高群跨かきて。高詰の裏よ。前の日の神事。角力たは
 語りつゝ。和主彼時の角力。あつど勝ぶき。所あり。角力たは。角力の
 手とあつど。ゆゑあり。我とつゝ。教てんとつひて。帷子と脱捨。裸よあり。で
 凳を飛下り。まづ掌と打力。足とふま。あじらる。元来身材。六尺よ近く。
 総身の色素。しと雪とつゝ。つゝ。骨柄あり。かくて。團七のひ
 髭あり。角力の関取。とらふとも。あじらる。骨柄あり。かくて。團七のひ
 りら。抑角力の四十八手。とらふ。原及捨。投掛の四手。より。あつど。頭を
 以て。とらふ。及つゝ。手とらふ。とらふ。及捨。とらふ。腰をわけて。す。及投。とらふ。
 足を以て。とらふ。掛。とらふ。此四手。十一手。つゝ。よ。わけて。四十八手。とらふ。とらふ。
 鉄平。とらふ。来。い。我。仕。方。と。教。べ。とらふ。て。鉄平。とらふ。て。相手。と。

組合て。かくすと。枕腕。とらふ。これ。及。つゝ。手あり。かくすと。片手。雙
 とらふ。これ。捨。とらふ。手。な。り。かくすと。擦。投。とらふ。こ。と。投。とらふ。つゝ。
 手あり。かくすと。掛。靠。とらふ。こ。と。掛。とらふ。つゝ。手あり。とらふ。仕。方。とらふ。
 教。へ。けれ。ば。奥。の。酒。飲。飯。食。て。居。る。者。寺。奥。ある。こ。と。お。お。り。ひ。と。か。ら。
 出。て。見。物。とらふ。あ。じ。ら。り。て。團。七。と。れ。と。休。今。一。盃。と。て。大。盃。を。と。ら。ひ。て。
 又。連。飲。よ。数。盃。とらふ。とらふ。け。と。ら。ひ。と。つ。ひ。は。扇。を。せ。ま。し。と。つ。ひ。
 居。る。に。鉄。平。由。酒。奥。よ。お。お。と。つ。ひ。は。る。を。和。殿。の。角。力。の。上。手。の。と。ら。ひ。
 あ。じ。ら。り。武。藝。も。通。達。とらふ。とらふ。よ。一。棒。つ。ひ。て。見。せ。ら。し。ま。し。や。と。ら。ひ。
 團。七。打。點。頭。腹。こ。か。し。に。つ。ひ。て。見。を。べ。し。と。と。傍。辺。よ。あり。ける。猪。お。ひ
 棒。と。わ。ら。り。て。地。上。よ。立。ま。が。棒。を。頭。より。高。く。さ。げ。て。風。車。の。ご。と。く。よ。

轉し。大当勢。小当勢。倒頭。上刺。閃腰。下穿。かどつら。さぬぐ。のし手。
つひて見せられ。鉄平。これと見て。轉感嘆。見物の者。追々集り。
奇妙の上手哉。とわむ。吉権。休む。あつらに見物の背後の。とめてつひ
なる。誰さうんとわひひし。文川の。團七。そのあつら。彼が。つみ。棒の。とめて
法より。か。い。ど。葉賣の。つみ。棒の。ごさ。唯。葉。手に。つひて。人の。目。と。慰。る
の。真の。棒。法。と。わ。ら。ぶ。と。漫。よ。つみ。棒。と。つひて。あ。は。笑。ぬ。
團七。これ。と。ま。さ。ら。何。奴。ど。と。う。え。は。是。乃。嵯。峰。右。衛。門。が。家。来。松。八
堂。九。郎。寺。兩。人。の。團七。これ。と。ま。さ。ら。先。來。の。酒。癖。大。に。癡。し。色。と。げ。り
よ。び。つ。ら。今。我。棒。法。と。非。り。た。ら。ん。松。八。堂。九。郎。の。汝。寺。舌。づ。り
動。と。こ。と。あ。れ。我。棒。法。の。虚。實。と。論。せん。小。の。自。由。で。勝。負。と。決。せ。ん。

汝寺。ご。と。免。輩。と。も。の。棒。と。り。ち。う。に。か。よ。い。ど。唯。我。拳。を。り。り。て。一。打。は
打。殺。と。い。さ。と。と。罾。棒。と。の。ら。う。と。投。捨。て。腕。を。抚。つ。と。來。と。り。ひ。る。の。
松。八。堂。九。郎。の。前。程。し。奥。の。間。を。わ。り。て。酒。を。飲。十。分。に。酒。氣。を。お。ひ
居。され。ば。これ。と。ま。さ。ら。大。に。怒。り。兩。人。と。も。小。の。り。の。櫛。棒。を。お。つ。と。り。て。
躍。出。松。八。の。眉。間。と。の。と。と。て。打。つ。と。て。團七。閃。り。と。身。を。ひ。孫。王。と。
これ。と。避。き。の。堂。九。郎。の。向。脛。と。ま。だ。た。ん。と。も。う。ひ。う。ち。小。打。を。
早。足。と。の。げ。と。と。り。こ。え。ん。る。不。透。間。も。多。く。左。右。ひ。と。く。打。つ。と。り。を。
こ。く。身。と。沈。て。背。后。よ。立。ば。兩。人。の。棒。た。が。ひ。と。ま。さ。ら。頭。と。打。合。て。
眼。々。と。俊。燈。所。と。團七。猿。臂。と。伸。し。松。八。の。襟。首。と。と。て。な。げ
と。り。足。と。飛。て。堂。九。郎。と。撲。的。踢。つ。り。る。と。松。八。の。四。五。間。飛。て

浮世草子傳説之一

三十一 爲來堂藏

前より溝川へまうさるるに落り。堂九郎の傍辺の苔井の裏より
此兩人日來此辺より来り。無理のひけて人と打擲せしむ。
狂破るゆゑ。前程よりこれを見物して居る者。此酒家乃翁も
か子て彼寺と悪居るおど。誰一人これとぞわる者。彼寺が辛目
見らるる体を見て。心中に快しとおひひ。おがえど咄と笑ひたり。時又焼
泥まじれより。堂九郎の濡氣のやうに這上り。数箇の人前
かく恥辱と受けたり。益堪恐るる。此上の真劍の勝負と決
べるとよびて。兩人ひきひきと刀とぬきあひ。唯一打と斬にけしむ。
圍七も手をゆる。一刀と抜て。丁とうけしむ。おやこしやありとよびて。
丁とよびて。打合る。見物の人々の驚き。逃去。只酒家の翁のみ。

難儀うかるべし。かゝるく見居たり。彼寺兩人の命をささぐ
戦ひたるが。つひに敵を克つ。焼ハハ額。堂九郎の肩尖は浅手を
おハ。おらこもに朱は染りて倒る。圍七の前後不覚の酔狂を
息の根とむべし。おハ刀とあつ上つ。鉄平のどろろと走りて。
後抱小抱せり。前程語りあひぬ。主人の教戒と忘れたまひし。
いとくろく。圍七酔中なれ。主人の二字をいし。走らる。
心つき。きりく手とせり。焼ハ堂九郎の面目なくやあり。起
起上りて。疵口をかえり。逸豆。て逃去。圍七のこれと見て。お
口小似ぬ。未熟なる奴原うか。つひて。呵く。打笑ふ。此時。入相乃
鐘ひびきて。日西山よ。鉄平の酒量。わさる。おハ。飲む。殊

前まへ程ほどよりさぬぐ心こころをつらひなるほど。酒さけ氣き全ぜんく醒さるればとて困ぐん七しちを
うさなやと。つらくにひこしうらなるに。困ぐん七しちのひらる。今日けふのちひがけど。
和わ主ぬしの懇げんる。饗け志しは管くだらて大おほ真まことと催もよほし。酒さけ錢せんのわかれ償つひべいと
ゆいど。鉄てつ平へいをちてつづる。酒さけ錢せんと酒さけ家かの翁おきなよついで。酒さけ器きかど
そこ鉢はちうらもわらふ。價あひをさうとぐしとゆい。とこし由よし換かへる物ものの
いひをさゆい。さて衣服いふくとさうて困ぐん七しちに。着きせ。帯おびちあさせ。雨あめ刀やいばとあひさせ
懷ふとろ紙し脱だつ巾きんかど忘わすれさるる。扇あふぎへ把とり。小こ人ひと途ち中ちゆうまで送おくるべし。
夕ゆふ月つき夜よこそ幸さいなれとゆいて。腰こしを抱かかり出でせ。さても臆おそ病びやうある奴やつ原はら
うかど。いまぞ彼かれ寺てらと詈ののり休やすむ。頭あたまおり足あしかろく。東ひがしに倒たふれ西にしは歪こがれ
ふづく嘔あうど吐どしつ。浪なみく踏ふくとしと飯いり去さぬ。酒さけ家かの翁おきなの溜たまり息いきと吻くち

つさて安堵あんどのかりひとちりり。さて九く堂どう九く郎らう寺てらの武ぶ谷たには逃のがれ飯いり
るに。嵯さ峨あ右みぎ衛ゑん門もん彼かれ寺てらが手て疵きずをかひ身みうち米こめにありて飯いると
えて。其その由よしと問とふ。かひる。子こ細こと語かたり。我われ輩らへとて由よし困ぐん七しちは敵たき
ことかひひぐさくひ。袖そでぐくひ。主しゅ人にん手てとさうして。我われが恥ち辱じやくとさうだ
あられう。とりの。嵯さ峨あ右みぎ衛ゑん門もんふづく思おも案あんしてゆひる。汝なんぢ寺てらが手て疵きずと
かひる。我われ為なす。幸さいなり。其そのゆゑゆつ小ことわれ。汝なんぢ寺てらもあるおとく。
此この度たび名な和わの館くわんより内うち命めいあり。我われは武ぶ豹ひょう太た夫ふの文ぶんと以もつて共とも召めいりど
されんとあり。彼かれは三さん代だい當たう国こくは任にん殊じゆは人ひと愛あいありのわれ。おのつら
人の尊そん敬けいあり。我われは近ちか来らい他た国こくより移うつ来きつれば。用もちらる。所ところ彼かれは勞らうなり。
まうのとあつど。動あもされぬ。文ぶん人にんの武ぶ人にんの上に立たんと。さうによりて

我彼と一時に召抱らる。時々のながく彼が下につくべし。我ま
深き宿望のこころ。彼に我眼中の釘あり。我今俄にその釘を
抜んご。一計とありぬ。其計とありぬ。明日豹大夫方へ果死
状とかくべし。其趣意の園七が為。我家来死をうけ。人前
恥辱とさうぬれぬ。主人さる。已武士の一分たらし。園七の下郎
我相手不足あり。これによりて足下と果死のべし。右果死の式法と
守り。相互と助太刀とりさう。べしと答ておらる。豹大夫文学
小の達し。これと武事よ於る。我に敵せんことある。和を乞
り。必定あり。さあ。時のこれとあがく。思ふ着せて。我彼が上に立べし。
若又果あんといふ。唯一鎗の下に一命と奪ひて。益我武備と輝

とべし。其上の園七めと。このやうにさうさう。心も終るべし。是金
良計とありぬ。とりの二人口と寺して。それあるべし。とりの嵯峨
右衛門彼寺が疵と見るに。さるの更もあはれ。深手の休よりて
さして。伏しあさぬ。かくて翌日。果死状と書。奴僕に持たせ
豹大夫が方へかく。豹大夫是と披見して。使の者と待せ。まづ
委細を糺さば。園七と叫ぶに。園七の昨日の酔狂と大は後悔
あて。私宅に打たれて居るが。主人の前へ。何寺の所用か。と
り。豹大夫。昨日嵯峨右衛門が家来。枯八堂九郎寺と疵と負せ
つることありや。とりの。園七の頭とされ。唯誤入て一言の返答もせざ。と
豹大夫さる。其更実とわじ。となつぬ。とりの。園七さう。頭とわげ。

个様くの事小て。彼寺兩人ありまを悪口いとし。其上真剣の勝負と
仕うけいゆを。やじと欲得ど。少く疵おつけいと。豹太夫打つて。汝
日來の酒癖を發し。醉狂の上の仕業小てあり。それ小つて。今嵯峨
右衛門方より。个様くの文言小て。果死状とあり。明朝雞鳴の時と
期し。八幡の濱小て果死あらんと。いひ越しぬ。我得心の返書を
つらさむやと。おりの人にし。且汝も子細と問つあり。りや用な
退けと。いひ。國七これと。言て大に驚さ。嵯峨右衛門が。何と由
心得む。拙者と。彼寺兩人と。果死合つら。まうて。ことと。理と。も。まうと。
べ。な。れ。双。方。主。人。の。果。死。合。あ。り。と。道。理。い。ま。ど。と。い。ひ。豹。太。夫。云。く。武。士
と。る。と。者。果。死。状。を。か。く。と。是。理。を。論。む。へ。身。性。之。珠。と。嵯。峨。右。衛。門。が

所為計策ありと。おりの人にし。いんとも。と。ま。う。と。ど。と。い。ひ。國。七。い。ま。ど。と。い。ひ。此。事。此。原。の
起りの拙者が。身より。出。る。と。い。ひ。に。い。ひ。拙。者。が。首。と。打。て。嵯。峨。右。衛。門
方へ。贈。つ。ら。い。これ。果。死。合。の。変。と。い。ひ。休。ま。さ。れ。と。い。ひ。國。七。か。く。い。ひ
心。底。の。豹。太。夫。武。藝。に。於。て。い。嵯。峨。右。衛。門。と。敵。を。ぶ。く。と。い。ひ。故。に。
我。命。と。も。と。も。主。人。の。无。事。と。も。い。ひ。と。お。り。の。人。に。豹。太。夫。彼。が。心。底。と
察し。お。り。ひ。あ。が。ら。い。と。い。ひ。と。色。雨。ら。げ。大。に。呵。て。い。ひ。る。の。愚。ある。変。と。い。ひ
奴。か。此。時。よ。の。ど。と。て。汝。が。首。と。お。り。和。と。乞。い。ら。る。恥。辱。あり。と。い。ひ
かく。に。果。し。わ。ん。と。あ。り。と。と。て。返。答。と。書。を。や。と。筆。硯。を。と。り。と。る。と。い。ひ
八雲。前。程。より。物。陰。の。委。度。と。言。走。り。出。て。夫。と。り。つ。と。こ。と。の。い
兒子。磯。之。丞。八。重。垣。寺。と。可。愛。と。い。お。か。が。さ。と。い。ひ。无。事。と。い。ひ。思。案。ひ

たひゆへといひて。涙あぐらにるや言葉とほくーるが。豹太夫少しも
宵入ど。武士の妻は似合ざる未練者か。と呵て。つひに果死合得心の返
昏とめて。使の者よりしぬ。使の奴僕返書と持て飯りなれば。嵯峨
右衛門いそぐーくとうと披見よ。かりひの外は和ととど。果死合はまほの
答るれば。大口あきて呵くと笑ひ。身のやどあぬ。腐儒者め哉。難を
まじるかどに多くて。我は敵せんともあか不便や。念佛と多くてまてかし。
彼が一傘の。我一鎗の下に失んぬると。独言又詈つ。其支度おどかり
り。豹太夫が方小の妻八雲。因七夫婦。ひささう愁ひ居るに。をぞよ
此日も暮て夜よりり。豹太夫の平く。顔色小て。其用意も
せざれば。傍の者寺の殊更に危くおびえて。安さ心いせざり。あて

三更の鐘響るれば。豹太夫八雲はびうひ。そちも寐よ。召仕の者寺も
そべて睡し。うといひて。巳の書齋は筆を。終夜書と読て居る
る。八雲の目もあぬ。眠るのそめて。睡もせど居る。程五更の
鐘ひびき。曉らうあり。起出て書齋に到り。約の時よも
あり。身の上の打拍と。おどそにその人うらや。食事もある人
りよ。豹太夫いかくさむり用意よ。おかうづべうど。今空腹はか
食事の飯りて。さむり。立上り。因七とひく。ひひけるん。
嵯峨右衛門互は助太刀と。りらう。手だれと。ひひ。若助
太刀と。隠し。おんも。し。汝我後より来り。物陰に隠居て。
若助太刀の者あへ。出て防ぐべし。さむり。おひ出へうど。ひひ合

常さぬの衣服は両刀とわび。男の男は支度てやあさるん長き竹と
以て柄としたる。鎗と携へて出まらる。八雲の背後姿を見かへて
これ此世の別とふいぬ。ぬらとかりひつ。打倒きて堪忍びる。たわ
涙と。一度は流してむせり。これの園七杖起して。必歎きたまふこと
かえ。拙者彼所へ参る。河主入り。河のさまんと。危き時。河助
太刀仕りて。恙なく。河段宅のまうに仕ひん。た人嵯塚右衛門鬼
神にもあれ。何をりのこと。うい。と力つけ。衣服の裾と。高く帯
ふか。い。え。さ。長。さ。刀。と。よ。こ。さ。袖。ま。り。し。後。と。あ。ひ。て。走。り。さ。ぬ。
去。程。は。嵯。塚。右。衛。門。の。豹。太。夫。より。前。は。八。幡。の。濱。に。来。り。て。ま。ち。居
る。は。誰。告。る。と。あ。く。此。噂。ひ。り。ま。り。て。近。と。あ。り。の。者。等。追。く。此。所。は

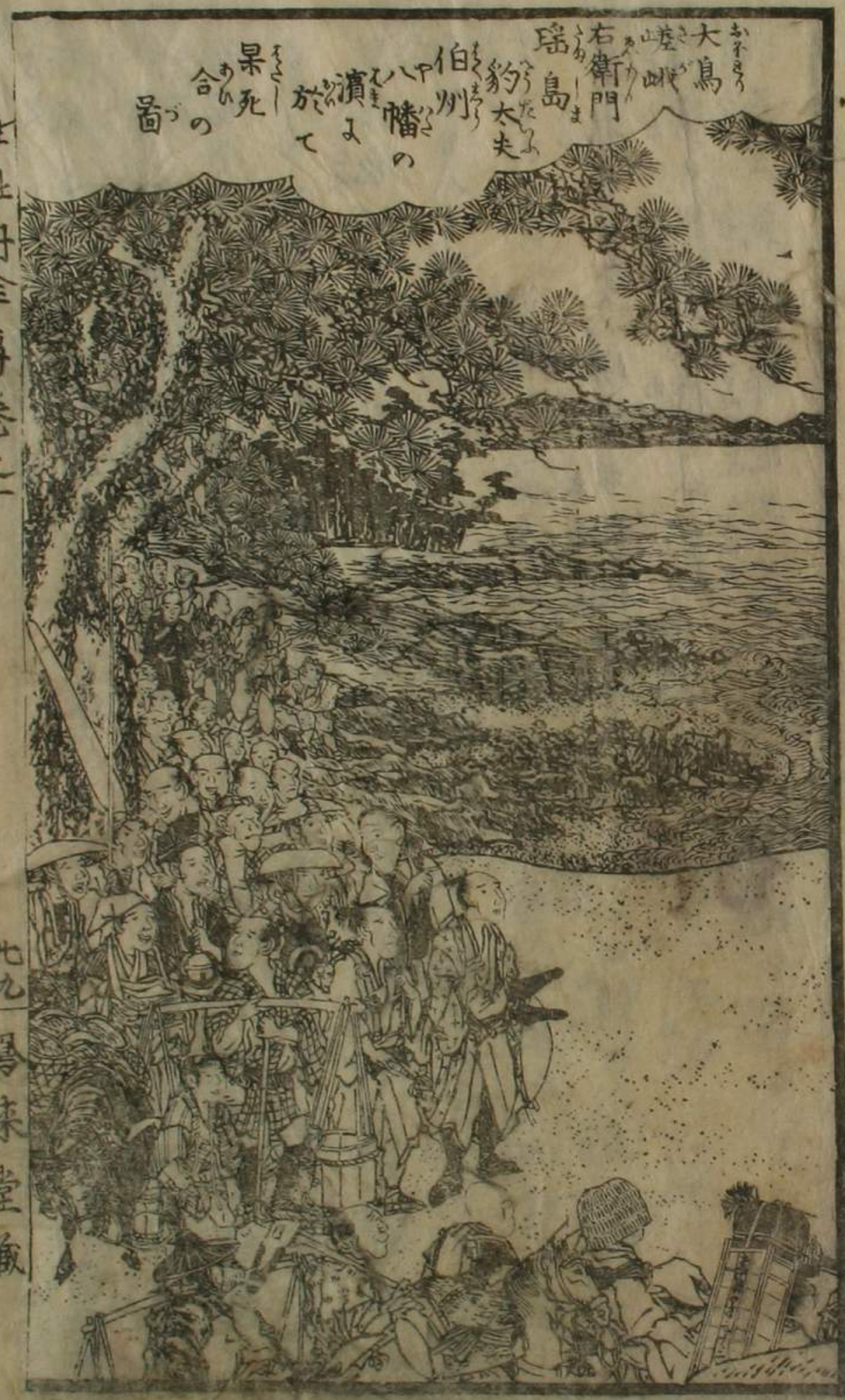
馳集り。或は芝山の。小高き所。或は岩の上。木の枝よの。か。る。も。あり。
海。の。舟。を。さ。り。浮。り。て。此。勝負。を。え。ん。と。い。し。め。た。あ。ひ。ぬ。程。か。く
豹太夫。も。此。来。り。双。方。東。西。に。別。て。立。對。ひ。つ。る。こ。れ。し。も。東。の
海。面。は。朝。日。輝。出。り。れ。見。物。の。諸。人。且。嵯。塚。右。衛。門。が。為。体。と。見。る。は
身材。さ。り。て。高。く。色。白。く。肥。太。て。渾。身。白。銀。と。り。つ。て。鑄。ま。り。し。も
こ。ろ。と。あ。く。稀。なる。養。男。あり。と。い。ん。と。も。睨。ま。り。さ。ぬ。ひ。る。ぐ。る。眼。中
光。と。放。ち。て。相。貌。い。か。の。づ。う。兇。悪。あり。其。打。拵。の。頭。髪。と。乱。し。て。
柿。色。の。布。の。願。巻。し。身。の。釘。綴。を。着。籠。褐。色。の。帷。子。の。白。布。の
禪。禪。ひ。さ。ひ。壁。手。觸。楯。を。つ。け。武。者。草。鞋。と。穿。朱。鞆。の。両。刀。を
さ。し。こ。ろ。し。十。文。字。の。鎗。と。小。腰。ま。い。え。さ。も。臂。を。い。く。し。て。仁。王。立。し

立ち上る光景勢猛烈ふして。いづれ強敵と日さうひらぐべうど
見えたり。豹大夫と見るに。身材ひさく。瘦れて。床の下に生
出る。豆の二葉のやうな。いと弱氣あり。打粉の常さぬあて。袴の
まぶさくさうど。短さ刀とおび。竹の柄の鎗を打さげ。藪々として立
ころさぬ。長閑なる春の風よも倒れつづらおひきて。虎の前より羊羔
の出るぶと。皇離の巢は紫變の迹づらさるよりあか危げあつた。
見物の諸人こぞと見て。あか笑止や。豹大夫の今も命を失ふべし。
とくく和とをへう。いりて。嵯峨右衛門は敵とぶさ。身と願ぬ
者もとりぬあり。且前も念佛ととる人可愛やとりひて。冷汗流るも
あり。此時嵯峨右衛門年三十一歳豹大夫の年四十二とある。時よ

嵯峨右衛門且言と出。豹大夫殿約とたぐんぞ来らと。神妙
さよとりぬ。豹大夫小入遅刻りとして。さぞな待りひつんとひひて
互らうく歩と寄。いさまわらひのさく。と色をかけ。嵯峨右衛門
鎗をとりぬ。ニツ三ツまできて。噓々とありひひ。呀と一色叫て豹大夫が
心前と目かけ。唯一突とつさうけり。豹大夫電のごくに身と避は。
嵯峨右衛門が鎗ひむた。く空をつさ。カ餘りて入身もあり。時
豹大夫彼竹の柄の鎗の穂先と抜捨て。竹のささと嵯峨右衛門が
面前へつとさうつけたるに。忽竹の先のうらうら。何れうあらん
青光り物出て。嵯峨右衛門が鼻のさたふひり。とひひく。嵯峨右
顔色青く変りて打まらさけ。尻居は撲地倒れて。岡絶あつた。

ろろ。あがりありて起上り。又鎗とさりあかりて突てけるに。豹大夫
あひひりり物とさしつれれば。嵯峨右衛門堪とて侍ふて鎗と地
上又磁礮と投捨て跳出。濱づひ又後と見せし逃去ぬ見物の
諸人これと見て。あかりり。豹大夫が持する何寺の物ぞし。あかり
こちあし。目とさめて。執見とば。是三尺むりの蛇を竹の空所又隠入
尾とくそついで逃ざるやうに。あまんと。苦しがりてひりり出。首ゆて
えたらく。夏の甚しきあり。見物寺あ不審れど。嵯峨右衛門の船の
上山の变化とさし見せける。あど。膽あはる者あるに。何とて小蛇と
あそれらん。案外あ。臆病者あ。見らるる逃さぬと。くらぐよりい
置て。あのがさぬ。四方あ。散乱とて散り去ぬ。先刻しり人此陰あ

かへ居て始終と見らる。因七走り出て主人の恙あはれを喜び小蛇乃
奇計と感とられ。豹大夫彼竹と投捨て。あがり袖の塵と打払い。
因七供せよとひて。相具して飯りぬ。さても八雲の因七が妻於握と
さゆよ。豹大夫が身のうんと案トらぐひ。たち居つ心ゆ心あ。あして。
音信と待居らる。豹大夫因七と具し。委々として飯来ふられ。あ
死したる人の蘇息とるさちして。限り多く喜びぬ。因七のけして喜び
あた人を介様とてゆひと物語りられ。八雲於握等不思議の
あひとみぬ。時よ因七いそ。嵯峨右衛門の大膽強気の者よいあ
何ぞ蛇をおそれぬやんとあひていぶ。あは。豹大夫いそ。あは七人の
性よりて。けうの物よあさる。と。類例とてあう。性古山城介三善



春家といふ者。きつめて蛇をおそれけるあるとた。夏の比るよ。深殿の
 辰巳のむこの山の木がたれは。殿上人君達二三人行て涼居るうちふ
 春家もまよつて居るうらる。傍より三尺をりの鳥蛇出たり。君達寺
 それ見よ春家とあるに。春家これと見るより。忽面色青くある。堪
 ぢた色とて。まよとさけびて逃んとしるる。二度まで倒れ
 皆ともふまを。這く出て巳が家と逃飯り。人ごちもあくありと
 妻子ごもの介抱小て。やうく正気ふありる。今昔物語と記し
 うる物ごりあり。嵯峨右衛門が性へ此春家の類あり。又大藏太輔
 清藤とり入りの。猫とおそれ。猫恐太輔とて異名をとりしこと
 同書と載り。都是其性として。りうの物を怖るあり。巳今朝の

ありまひ童の戯も又似されむ。其おそりふりて。計を施し
 てんと。彼春家が更よりあひつたぬるどり。彼阿絶して倒るる時
 斬りさうのべられむ。原打果をんと所存とあり。ゆは。さそりるよ
 まをて走りあつと語を。八雲傍より。あん身ゆふして。嵯峨右衛門
 蛇を怖ることとありたまひしやうんととたぬれば。其不審うべる。こ
 此春名和の漢の酒樓にて。我彼又とらめて相見えしとた。さ
 らぬ絃をたぬあり。淫哇の色よのせて歌うて人者あり。酌
 立ちる女は問は。旅ありきと。琵琶法師が。近來琉球国より渡り
 三線とり入物ありと。弾を。此辺の人奇りたり。弾をとりとり
 其器をよば。借て見る。更いあり。またたやとり入。安きこととぞと

ついで頓て携来て見せり。これと見るに三絃小しと蛇皮をわけて張
る器あり。琉球國人毎小三絃を鼓て遊弄を。蛇皮とりわける
ゆゑに蛇皮線とりやりしまづる。今見る夏の奇しきよと云ひ此時
嵯峨右清つ。厠より立て飯り来小され。あづり物これ見たまといひて
彼蛇皮線を面前へさしつゝ。嵯峨右清つこれと一目見ると
ひそく。顔の色さうさう。藍のやうありて走飯りたり。これよりして
彼が性蛇を怖るさうさう。飯ありぬ。前の日船の上山より相伴て
飯りぬると云ひ。葆の裏に蛇ありん。飯かきさうさう。益彼の
蛇をきらふと云ひぬ。我彼と云へし。いせされども。かみて彼と相
奸邪佞悪の相あり。彼名和のまん館へ召出され。必りらへ

災と起ると云ふ者。と云ふ。あついで彼を嬖よおつれ。口と困てい
果死状と贈しと幸と。計とりて彼と走し。あついで名和の
少為と云ひてせしと云ふ。彼の人前にて。恥をおひぬれば。他国
走り。夏必定。是大なる災と避さるありと語りければ。皆く其思慮の
奥妙多と感とらる。果して豹太夫が言ふたがど。嵯峨右清門との日
いそぐ。家財とさうさう。八堂九郎。兩人と具して。何方とも
逃去り。ついでつが日は到り。豹太夫。因いと深るれども。やびこ
総角の比より召つひて。全従の因いと深るれども。やびこ。得ど今日
あついで勘当と云ふ。其のあつらるれば。嵯峨右清つこと。一旦少鼓の召抱
るべき。内意あり。者ありと。走らり。其原の汝より出され。館へ對し

有りて汝をめしつひごとし。これよりて勘当となり。妻子とあびて係よ
浪くの身とありん。さを難幾あるべし。金とありたり。何方よも
身と退と。此金とりてりある活業ともし。妻子と養へり。汝を原
るに性の者のされん。酒癖よりて事と誤りつれば。此石必酒とぞを更
るも。妻の梶の更の幼少より。亡父丹下殿のいとと。とあひり者のされん。と
枝らちるよふのびどと。汝はつれと。これも又せん。と。と。委細
つひすせ。金丸両方へん。困七の主人の情と感。身の誤を悔。つひ
と。唯男泣は泣。約太夫も最不便とあひて。ひとと。涙とあはし。と
八雲のか。情深き更と。つひすて。番古の小袖のあ。他の飯の森
の時もあり。ふか。小恙と。と。と。涙とあはし。慰められ。顔も

えのげと泣居より。これよりて困七係の家財をとりと。行装をとり。と
夫婦つれ立。子市松が手とひきて。涙とあはし。住むと。所と放して。
何地をわてとも。出去ぬ。借約太夫奇計をりて。嵯塚右衛門を
走りし。あ。名和左衛門の耳は入。それより。臆病者を召抱ぬ
こそよりつれと。吹嘘せし。疎忽を呵たす。益約太夫が
才徳を賞。使者をつら。高祿を宛行。と。と。と。
直昏と。拜謁と。君臣の礼を。長知手つ。千手院力王の
刀と。十分の首尾

六
行
行

ま
か
母



